

総説

教養課程の改革

石浦 章一

東京大学 大学院 総合文化研究科

はじめに

私たちは、平成27年4月より、総合的教育改革という名のもとに新しい教養教育を開始した。今回、埼玉医科大学で講演の機会をいただき大変光栄に思うと同時に、この新しい教育の効果がどれほどかについての今後の評価も気になるところである。今回、私たちが歩んできた教育改革を回顧し、大学での教養教育について考えるところを述べてみたい。

1. 授業評価

東京大学では、入学後まず2年間は教養前期課程として全員が駒場キャンパスで授業を受ける。そこで私たちは、講義の効果を判定するための一助として2001年より「学生による授業評価」を開始した。これはすべての授業を対象に行うもので、7種類の質問肢を用意した。通常の座学である講義と実技やゼミなどを同一項目で評価できないからである。これらを統計の専門家によって解析した結果から浮かび上がってきたことは、1)説明がわかりやすく、授業内容が興味深ければ、総合評価が高くなる、2)授業を、よく準備・計画し、熱意があると感じると、総合評価が高くなる、3)授業がやさしく内容が少ないほうが総合評価が高くなる傾向にあるが、上記のことが守られていれば、これらは総合評価にほとんど関係しない、ということが明らかになった。すなわち、授業評価項目にある板書の上手下手、話し方、授業の難易度、授業計画の立て方、教員の熱意、質問への対応、授業内容、出席率、予習復習の有無、などを個別に聞いても、総合評価には直接関係せず、説明のうまさ、授業内容への興味、結果的に知識を獲得したかどうか、の3点を聞けば、おおまかな総合評価に対応することが明らかになった。

授業評価の目的は、教員に順位をつけることではない。結果的に、学生の知識獲得・進路選択にどれほど助けになったかがわかればよいのだが、これが難しい。まず取り組んだのは、ハード面の改善である。授業評価によって、教室のファシリティーやマイクなどの改善が行われた。次に、学生の希望する授業の開講など、自由記述から読み取ることのできる学生の不満をできるだけ解消すること

に努めた。次は、ソフト面の改善である。学生の理解度が低い場合には、授業内容の変更、演習の導入や画像の利用など授業方式の変更を行った。同時に、新任教員への研修、授業に定評のある教員への参観授業を実施し、基本的なティーチングスキルの教授を行った。また、授業は教員の昇進の参考にする、ということも徹底した。また、授業評価は毎年同様に行われるために、評価慣れを防ぐ目的で、定期的にファカルティーディベロップメント(FD)を行うことも決めた。しかしながら、これらに参加しない教員も少なからず見られ、意欲的な教員ばかりが参加するFDの意味についても考えざるを得なかった。

現在のところ、授業評価を効果的に続けるためには、優良教員への褒賞と並んで結果を勤務評定に使うことが必須であろうと思われる。

2. 新しい教養教育

それでは、東京大学が始めた教養教育とはどういうものか、紹介していこう。図1は、現在の教養課程1,2年生で何を教えているかを簡潔に表したものである。基礎科目は必修、総合科目と展開科目は選択、そして主題科目は専門性を備えた選択科目である。右に囲ってあるのは、平成27年度から新しく取り入れた種目である。特に展開科目は、基礎科目の上位にくるもので余裕と能力のある学生が自主的に選択するものである。

これとともに、時間割も大幅に変更した。本学に特有の進学振分け制度(履修科目の点数によって進学先が決定される制度)があるために、文科省のこのような1学期間に15回の授業時間を確保することができないので、90分×15回の代わりに、105分×13回の授業構成にした。そのため授業開始を9時から8時30分に変更するとともに、試験期間も確保した。また図2に示すように、2セメスター・5ターム制に変更した。これにはいろいろな事情があるのだが、この変更によって1,2年生のS2タームに海外のサマースクールなどに短期留学することが可能になったのである。そのため、この時期には必修講義を入れないような工夫もした。

3. 目玉は初年次ゼミナール

新しい教育の目玉は、初年次ゼミナールである。これは、

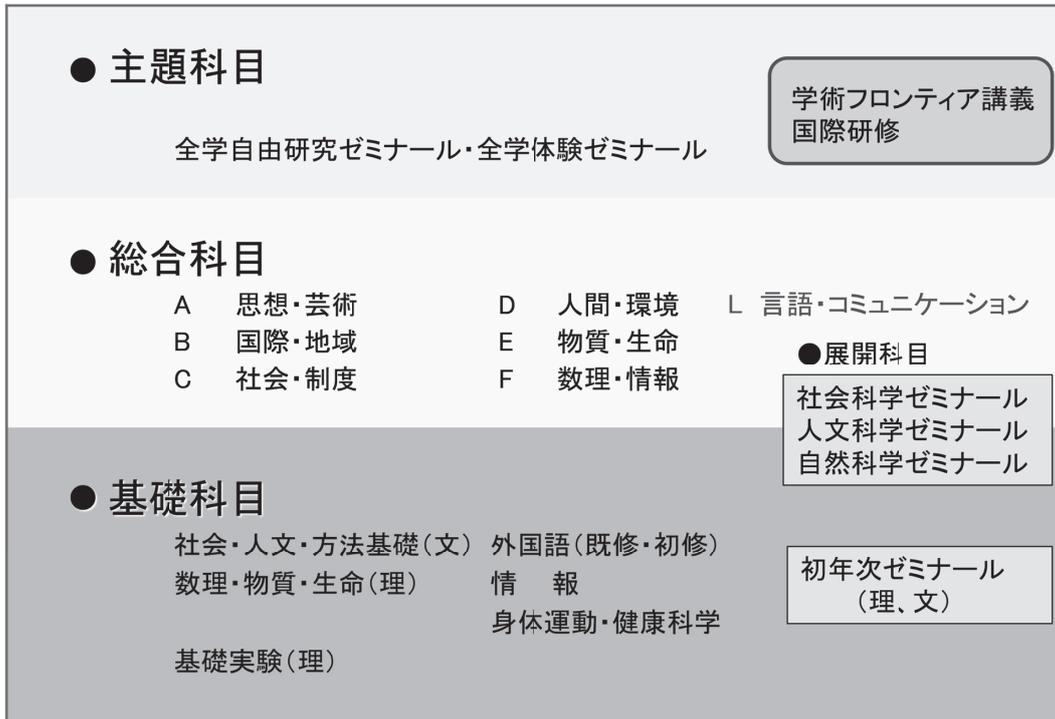


図 1. 前期課程の授業科目.

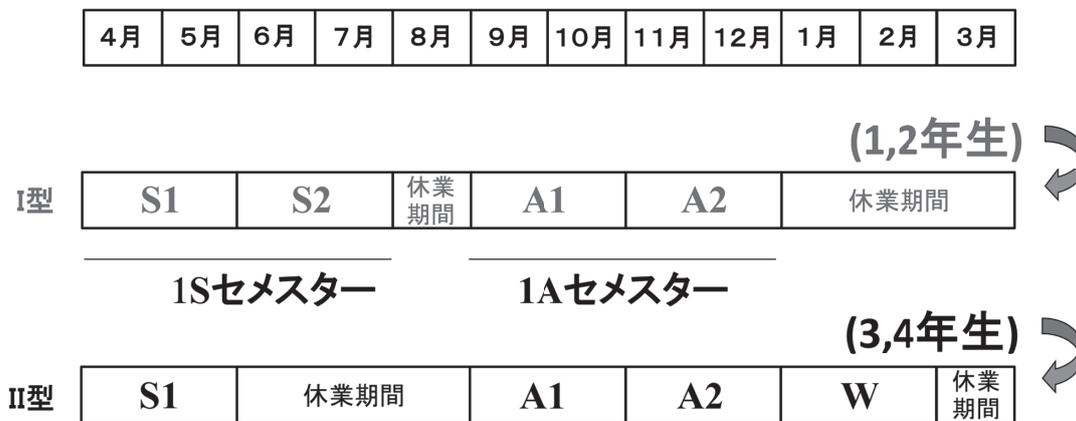


図 2. タームとセメスター.

文科・理科ともに約 20 人のクラスを 150 近く作る。この小人数クラスで、グループワーク、プレゼンの初歩、学術論文の読み方、文献検索法、ピアレビューなどの手法を習得した上に、それぞれ教員の専門分野について学ぶのである。

たとえば理科では、問題解決型、論文読解型、現場体験型、データ解析型などがある。順に例を挙げると、医学部教員は「再生医学」をテーマにし、どうすれば臓器が作れるかを議論する。理学部教員は「宇宙は何でできているか」を題材にし、工学部教員は「3Dプリンターによるコマ作り」を行う。教養学部教員は「通説の真偽を探る」と題して種々

のデータを駆使する。

一方、文科では、ディシプリン型、文献批判型、フィールド型、政策提言型と、取り上げるものが理系と少し異なる。例えば、社会問題の考察の方法を考えたり、公法学の基本文献を読んだりする。また、東京の産業地区の変化と課題をとりあげたり、安全保障貿易管理について考え、そこから新しい外交のやり方を模索するのである。これらはすべて、教員からテーマを公募し、学生がその中から選んでゼミに入るのである。もちろん、希望のゼミには入れるかは神のみぞ知る、である。

私たちは、このアクティブラーニングの手法を学ぶこと

は大学1年生には必須であろうと考えている。高校までの与えられた教養ではなく、自ら学ぶ教養の楽しさを知ってもらいたいからである。

4. おわりに、後期教養教育の大切さ

私たちは、教養教育は1, 2年で終わり、とは考えていない。図3のように、3, 4年生になってもずっと教養教育を続けるべきで、たとえば4年生のときしか学ぶことができない教養もあるはずだからである。研究倫理は自分が実験を行って見なければ、その重要性がわかるはずがない。その意味で、研究を始めた時点で科学技術社会論とともに研究倫理教育を行うのは、意味のあることであろう。この他に、後期教養教育とされているものはいろ

いろあり、領域横断型の科目であるバリアフリー、脳科学や、外国語の高度な運用能力を引き出すトライリンガル・プログラムなどを用意している。これらを強制するのではなく、自主的に学ぶ環境を作ることが教養教育を実践する上で重要であると考えられる。

文 献

- 1) 石浦章一. 東大教授の通信簿. 平凡社新書; 2005.
- 2) 藤垣裕子, 廣野喜幸編. 科学コミュニケーション論. 東京大学出版会; 2008.
- 3) 日本学術振興会編. 科学の健全な発展のために. 丸善出版; 2015.

1年次	前期教養教育	初年次導入教育
		専門基礎教育
		(狭義の)リベラル アーツ教育
1~2 年次		
3~4 年次	後期教養教育	

H27より

図 3. 後期教養教育.